



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4027 号 2017.11.19 発行

### 日本の障害者芸術 好評 仏ナント市で作品・舞台披露 盛況、連日1500人鑑賞



毎日新聞 2017年11月19日  
「瑞宝太鼓」を披露する南高愛隣会のメンバー

日本の障害者の文化芸術の祭典がフランス西部のナント市で10月下旬に開催された。絵画や陶芸作品のほか和太鼓などのステージもあり、日本から障害者ら340人以上が参加した。ナント市は衰退した造船業に代わって文化や芸術を核にした町づくりで復興したことで知られる。連日どの会場も文化や芸術に目の肥えたナント市民で埋め尽くされた。【野沢和弘】

知的障害者や精神障害者らの絵画や陶芸作品計900点以上を展示した「KOM

OREBI (木漏れ日) 展」はビスケット工場を改装したフランス国立現代芸術センターで開催された。連日1500人を超える鑑賞客が訪れ、食い入るように作品を見つめていた。

既存の価値観の手あかが付いていない芸術という意味で「アール・ブリュット (生の芸術)」と呼ばれる。フランスやスイスが発祥地として知られているが、2000年以降、日本の福祉職員らが障害者の作品を欧州の美術館に紹介し、その価値が世界の美術関係者の間で認められるようになった。



日本の障害者の絵画や陶芸作品を大勢のナント市民が鑑賞した  
ジャンマルク・エロー氏

知的障害者による和太鼓や伝統芸能、現代劇なども披露された。長崎県の社会福祉法人・南高愛隣会の「瑞宝太鼓」は雨の中を行列していた人々が600席の会場を埋め尽くした。4日間で計6回のステージがあり、毎回、観客が総立ちになって拍手を送った。

島根県のいわみ福祉会の知的障害者らによる「石見神楽」は古事記の神話を題材とする郷土芸能だ。太鼓や笛のリズムと張り子の大蛇の舞が人気を集めた。

小室等さん、坂田明さんというプロのミュージシャンの生演奏で知的障害の人々が即興

の創作ダンスを披露する「湖南ダンスワークショップ」は、フランス人の振付師と共同で創作した作品も発表し、大きな拍手を浴びた。

このほか、日本の文化芸術や障害者支援の専門家とフランスの専門家らによるシンポジウムも計8回開かれ、日本の障害者福祉の歴史や芸術活動の意義などについて議論された。目や耳の不自由な人のための日本のバリアフリー映画も上映された。

このイベントは文化庁やフランス国立現代芸術センターなどが主催した。滋賀県の社会福祉法人グローを中心とした障害関係17団体による「障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会」がフランスの文化芸術機関と4年前から準備してきた。今後もパリやスウェーデンなど各国での開催が予定されている。

文化創造都市、高い審美眼

日本では障害者の絵画や和太鼓は「遊び」「レクリエーション」としか見ない人が多い。あるいは治療（アートセラピー）や健康づくりと思われている。

ところが、フランスでは日本の障害者の作品は「芸術」として、その水準の高さが以前から評価されていた。今回のイベントは世界的な文化芸術の創造都市として知られるナント市で開催された。熱狂的とも言えるナントでの人気は、日本国内での障害者芸術に対する再評価を迫ることになるだろう。



「文化芸術を土台にこの町は発展してきた。市民はその価値をよく理解している」。連日各会場に姿を見せたジャンマルク・エロー氏は語った。1989年から12年まで計23年間、市長として町の再興に尽力した。

フランス西海岸に面したナント市はかつて造船業で繁栄したが、高度成長期の日本の造船業によって大打撃を受け、一気に衰退した。

エロー市政は文化芸術を核にした町づくり政策を推し進めた。閉鎖された製鉄工場や造船所などを美術館や文化活動の拠点として再利用し、観光客の誘致に成功する。広大な造船工場の跡地は遊園地に姿を変えた。巨大な象のオブジェが子どもたちを乗せて動く「ラ・マシーン」やメリーゴーラウンドは造船技術を生かした芸術作品として評価されている。造船所時代の鉄塔や引き込み線をできるだけ敷地内に残している。

「町の記憶」を残す再開発に努めたのは、市民の誇りや連帯感を大事にするためだとエロー氏は強調する。産業の衰退と人口減少で自信を失った市民に希望を与え、精神の豊かさをもたらしたのが文化や芸術だという。

大学や美術・建設・デザイン学校を次々と開設し、若者たちの姿が町に戻ってきた。過ごしやすい季候や住宅の安さもあり、若い世代の移住者がさらに増えている。それに伴い、保育所の拡充や子育て支援策も強化した。最近は大学病院と連携した研究機関が新ビジネスにも貢献している。

物質的な豊かさがある程度行き渡った先進国の市民は、モノの消費よりも健康や教育や文化・芸術に関心に移りつつある。造船業や製鉄業の衰退からよみがえったナント市はこれからの先進国の地方都市の復興モデルにすべきだと、青柳正規・前文化庁長官は著書「文化立国論」で指摘する。

フランスの失業率は高く、移民を敵視し貧困層への福祉を嫌悪する社会的勢力も強い。障害者と芸術に関するシンポジウムでは「障害者の作品だからという理由で評価しているのではない」という言葉が何度も聞かれた。年間数十回と開かれる音楽会や演劇でも観客は面白くなければ遠慮なく退席するという。厳しい現実主義の中で文化や芸術は磨かれ、その社会的価値が認められているのだ。

今回のイベントのためにフランス側の美術関係者は何度も来日して日本国内の障害者の芸術活動や作品を視察して歩いた。海外で開催される日本の文化イベントは、ほとんどが日本側の経費負担で行われるというが、今回は総経費の半分以上をフランス側が負担したという。日本の障害者芸術に対する評価の高さを物語っていると言えるだろう。

## 男らしさって？ 11月19日は国際男性デー 三島あずさ 朝日新聞 2017年11月19日

対談する（左から）村田信之さん、青野誠さん、松木大地さん＝12日、東京都千代田区



11  
月19  
日は「国  
際男性  
デー」。  
男性や  
男の子



の健康に目を向け、ジェンダー平等を促す日として、1999年にカリブ海の島国トリニダード・トバゴで始まったとされる。国連が定めた「国際女性デー」に比べて知名度は低いが、日本でも男性の役割や健康について考える日として、少しずつ広がりを見せている。

### 一家の大黒柱？専業主夫は男らしくない？

国際男性デーの制定を求める動きは1960年代頃からいくつかの国であり、最終的に、トリニダード・トバゴが99年11月19日に始めたのと同じ日程にまとまっていったようだ。現在、数十カ国で祝われている。

都内でも12日、「男性は一家の大黒柱」「専業主夫は男らしくない」といった思い込みや、組織にとらわれない生き方について語り合うイベントが開かれた。女性が野心的に挑戦できる社会の実現を目指す民間団体「LEAN IN (リーン・イン) TOKYO」と、昭和女子大学ダイバーシティ推進機構が主催。性別役割分業など社会で「当たり前」とされてきた枠組みから、一步踏み出す(lean in)ことをテーマに男性3人が対談した。

## 認知症高齢者の事故に公費給付金 神戸市、全国初の救済制度導入へ

産経新聞 2017年11月18日

認知症と診断された高齢者らが起こした交通事故などの被害賠償をめぐり、神戸市は、公費から給付金を出す全国初の救済制度を導入する方針を決め、18日の有識者会議で制度案を含む条例案を報告した。市は条例案を来年2月にも市議会に提出し、平成31年度からの制度導入を目指す。

一方、多額の損害賠償請求が見込まれる鉄道事故は、対象に含めるかどうかさらに検討を進める。

市によると、制度案では加害者か被害者のいずれかが市民で、認知症患者による交通事故や暴力行為などで第三者にけがをさせた場合などを想定。委員会を新設し、救済対象となる事故や給付額を判定する。給付金は公費から捻出し、上限額は最高で約3千万円を支給する犯罪被害給付制度などを参考に検討する。

認知症高齢者の事故をめぐるのは、22年に愛知県で認知症の男性が電車にはねられて死亡し、JR東海が家族に振り替え輸送代など約720万円の賠償を求め提訴したことで注目を集めた。神奈川県大和市では、認知症患者を事前に登録し、既存の民間保険を活用する形での救済制度を導入している。

## 特製ジェラートいかが 美濃加茂の障害者施設に販売店 中日新聞 2017年11月19日

美濃加茂市西町の障害福祉サービス事業所「きらら美濃加茂」に、ジェラート店「キラ

ラジェラート」がオープンした。利用者らが手作りした商品を販売。季節に合った常時十種類をそろえ、静かな人気を呼んでいる。十九日は坂祝町サンライフさかほぎで開かれる福祉・健康フェスティバルに出店する。



手作りジェラートをアピールする利用者ら＝美濃加茂市西町で

コーヒー、マーブルチョコ、抹茶、みるく…。ショーケースの中に色とりどりのジェラートが並ぶ。地元特産のナシ入りも。施設管理者の宮田浩臣さん（45）は「まったくとして、とろけるような食感。風味や甘さのバランスも工夫して仕上げた」と笑顔を見せる。

利用者が多くの人と接することができるようにと、同施設は昨年四月の開所時からジェラ

ートの販売を計画し、小さな木造店舗棟を用意。職員らが県内外の専門店などに製法を教わりながら試作を重ね、九月末の開店にこぎ着けた。

四人の利用者が中心となり、県産牛乳や地元農家から提供された果物などを使って製造し、接客にも励む。多い日には二十人ほどが来店するといい、「みんなの対応も様になってきた」と宮田さん。「どんどん種類を増やして、地域の人に楽しんでもらいたい」と力を込める。

価格はシングル二百五十円、ダブル三百五十円で、店内のテーブルで食べることができる。コーヒーやジュース、土産用のカップ商品も用意。利用者が作ったさをり織りやペーパークラフトも販売している。

営業は平日午前十時～午後五時（三～十月は午後七時まで）で、十一～二月は水曜日休み。

（問）きらら美濃加茂＝0574（27）1977 （平井一敏）

## 千葉）障害者支援のNPOが10周年フェスタ 習志野 佐々木和彦

朝日新聞 2017年11月19日

和太鼓の練習をする子どもたち＝習志野市

知的障害者を支援する習志野市のNPO法人「希望の虹」が19日、市内の習志野文化ホールで、創立10周年記念の「レインボーフェスティバル2017」を開く。

2007年3月に創立し、翌月から学園おおくぼ商店街の信用金庫店跡で事業を始めた。昨年5月、近くに「レインボー学園」と名づけた施設を新築して移転。未就学児の発達支援や児童・生徒

の放課後デイサービス、成人の就労支援などに力を入れている。

午後1時からの舞台は、利用者に取り組む和太鼓、よさこいソーラン、フラダンスなどの第1部と、和太鼓奏者の月村路子さん（34）ら余暇活動指導者が登場する第2部で構成。

## 伊賀で12月10日に講演 障害者、若者支援に尽力の中村さん

中日新聞 2017年11月19日

障害者が働くレストランとして知られる伊勢市小木町の「くろふねファーム」などを運営する経営者、中村文昭さん（48）＝同市＝の講演会が十二月十日、伊賀市阿保の青山ホールで開かれる。引きこもりの若者の支援などに取り組む中村さんが、「何のために」を

テーマに生きる意味を語る。

「家族で聴きにきてほしい」と中村さんの講演会をPRする神山さん＝伊賀市阿保で

中村さんは皇学館高校を卒業後、上京して野菜の移動販売を手伝った。伊勢市に戻ってレストランや結婚式の企画を手掛ける会社を経営。ニートの若者らに農業を紹介する活動など社会貢献にも力を入れ、年間三百本の講演もこなす。

伊賀市での講演を企画したのは、市内で時計・宝石店を営む神山幸久さん（44）。中村さんの講演会を十年ほど前に聴き、それから親交を深めてきた。「返事は0・2秒」「頼まれ事は試され事」など中村さんのモットーから大きな刺激を受けてきた。「笑いあり、涙ありの講演をぜひ家族で聴きにきて」と呼び掛けている。

講演は午後一～三時。前売り二千円（当日二千五百円）。中学生以下は無料。（問）神山さん＝090（5450）9952（飯盛結衣）



#### A型事業所、相次ぐ大量解雇 障害者雇用、食べ物 容易に補助金、参入急増



毎日新聞 2017年11月19日  
事業所の運営会社から倒産を告げる書類を受け取った男性＝名古屋市で、塩田彩撮影

一般就労が難しい障害者が働く「就労継続支援A型事業所」で突然の大量解雇が相次いでいる。企業の参入が相次ぎ、事業所は6年間で5倍に急増したが、公的な補助金を目当てに開業し、障害者に適切な仕事を与えない悪質な事業所も増えているとみられる。専門家は国の制度設計の不備や自治体のチェック体制の甘さが背景にあると指摘

している。【上東麻子、小林一彦、塩田彩】

#### デザイン系学生と障害者施設の利用者 独自フォントで土産品試作

東京新聞 2017年11月19日  
渋谷区のデザイン専門学校と障害者施設の利用者が協力し、おしゃれでデザイン性のある文字の書体や絵柄「シブヤフォント」を作る取り組みを進めている。2020年東京五輪・パラリンピックまでに、シブヤフォントを使った渋谷らしい土産品を生み出すのが目標で、今月、試作品が完成した。（神谷円香）

シブヤフォントを使い、学生と利用者が協力して作った雑貨＝渋谷区で

シブヤフォントは、区内七施設の利用者と桑沢デザイン研究所（神南一）の学生たちが一緒に制作。試作品は渋谷ヒカリエで開かれた「超福祉展」で十三日に公開され、Tシャツやスリッパ、絵皿、コースター、時計など数十種類が来場者の目を引いた。

プロジェクトは昨年十月、大勢の観光客を集めな



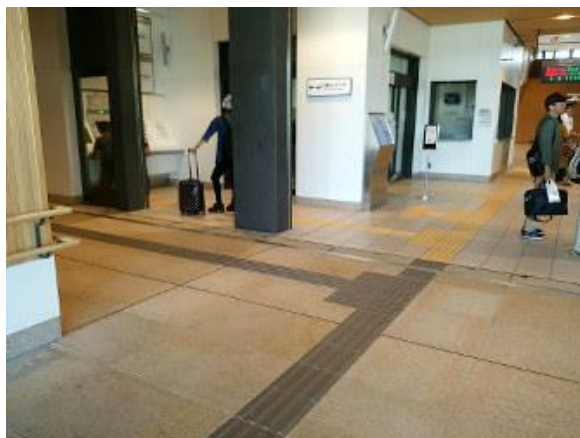
から記念となる土産品がない渋谷に、この地域らしい「多様性」を伝える物を生み出そうと始まった。当初は製品自体を作ろうとしたが今年二月、利用者が書いた文字を見た学生の「文字をデザインしたら面白い」という発案から、まずは素材作りをすることになった。

利用者は茶わんに盛ったご飯の絵をいくつも並べるなど独自性ある絵を描き、学生はこうした絵にアレンジを加えてデザイン性を高めた。3Dプリンターやレーザーカッターを使える区内のものづくりカフェ「F a b C a f e」で場所を借り、作ってみたい雑貨の形やデザインを一緒に考えた。

福祉作業所「ふれんど」（笹塚二）の古戸勉施設長は「プロジェクトは自由な創作の時間として、気兼ねなく無理強いせずにはやってもらった。利用者は普段の作業にも張り合いが出たようだ」と話す。作業所で作るスリッパのデザインにも、シブヤフォントを取り入れた。

シブヤフォントは専用サイトから一部無料で、順次公開する新作は五百円でダウンロードできる。料金は施設への支援金となる。プロジェクトには毎年新たな学生が参加し、渋谷土産の完成を目指す。

### 点字ブロック やっぱり黄色「弱視の人にも見やすい」 毎日新聞 2017年11月19日



床面と同系統のグレーの点字ブロックが敷かれているJR高山駅構内。奥には黄色の点字ブロックもある＝岐阜県高山市で、視覚障害者生活情報センターぎふ提供

景観の観点からグレーや白色、茶色の点字ブロックが各地で広がり、視覚障害者団体が「弱視の人には見えにくい。黄色にしてほしい」と求めている。点字ブロックの色を規定する法律や制度はなく、設置者の裁量に任されている。【高橋祐貴】

弱視者は点字ブロックの凸凹だけでなく、目で追うことで歩行の助けとしていることが多い。日本盲人会連合によると、全

国約34万人の視覚障害者のうち弱視者は7割に当たる約24万人。弱視者である岡山県視覚障害者協会の片岡美佐子会長（64）は「黄色以外だと道路に溶け込んで見えず、自転車や歩行者とぶつかることがある。命に関わる問題だと知ってほしい」と訴える。

「飛驒の小京都」と呼ばれる岐阜県高山市。玄関口であるJR高山駅の駅舎や西口のバス停近くに、歩道と同系色のグレーの点字ブロックがある。昨年10月の駅改修工事で敷かれた。JRが担当した部分は黄色だが、市が敷設した部分の多くはグレーだ。

市の担当者は「デザイン性を考慮した」とした上で「歩道と点字ブロックの色に濃淡をつけている」と説明する。高山市視覚障害者福祉協会は改修工事の前から黄色にするよう市に要望していたが、受け入れられなかった。今年4月、黄色への変更を求める要望書を提出したが、市は変更しない方針で、改修中の東口付近では黄色を多く設置するとしている。

JR金沢駅でも2014年3月、北陸新幹線開業に伴う再整備で西口付近のグレーの路面に白色の点字ブロックが敷設された。設置した金沢市は「デザイン性のある都市作りで観光客の増加につなげたかった」と話す。石川県視覚障害者協会との事前協議で反射材を入れることで合意。しかし、同協会によると、弱視者から「横断歩道と区別がつきにくい」との声が上がる。

こうした問題は以前からある。京都府庁では1990年の庁舎建設時、190カ所に約1300枚の茶色の点字ブロックが敷設された。建物との色調を合わせるため、府視覚障害者協会が約5年前から毎年、黄色にするよう求めているが、改修予定はない。府は「補

修の際、黄色を設置したい」としている。

点字ブロックの色に規定はない。旧建設省が85年に各都道府県に出した指針で「原則黄色」としていたが、01年に日本工業規格（JIS）で形状の規格が統一された際に色の条件は盛り込まれなかった。路面とのコントラストを確保できればよいとの判断だったという。06年施行のバリアフリー新法では「周囲の路面と容易に識別できる色」とされている。

路面との対比、鮮明にすべき

点字ブロックに詳しい成蹊大の大倉元宏教授（人間工学）の話 年を取ってから視力に支障が出て、白杖（はくじょう）や点字ブロックを使う生活には慣れていない人が増えている。行政は景観ばかりを意識するのではなく、こうした人たちに寄り添って点字ブロックを敷設してほしい。黄色が望ましいが、少なくとも路面とのコントラストがはっきりした色にすべきだ。

デザイン性より優先を

点字ブロックの見やすさを示す数値として、路面との明暗の度合いを表す「輝度比」がある。輝度とは物の明るさを表す単位で、一般財団法人「国土技術研究センター」のガイドラインによると、「輝度比2.0」程度なら弱視者にも晴眼者にも見えやすい。

黄色は明るい色だが、路面も明るい色の場合は輝度比は小さくなるため、どんな場所でも黄色が見やすいわけではない。ただ、一般に路面は暗い色が多く、黄色は輝度比が確保しやすい。

札幌市では2000年に点字ブロックの整備基準を作成し、「原則黄色」としている。市は「黒やグレーの舗装道路を基本とすれば、黄色が好ましい。デザイン性の観点という話もあるが、弱視の人への配慮を重視した」と話す。金沢市や高山市は独自のガイドラインは作成していない。金沢市によると、JR金沢駅付近では輝度比が1.5未満の場所があるという。

岡山県はJR岡山駅（岡山市）東側の「桃太郎大通り」（約1キロ）の点字ブロックについて、県視覚障害者協会の要望を受け、05年の岡山国体開催に合わせて大半をグレーから黄色に変えた。

## 難病患者と研究者の懸け橋に 山本育海さんが講演会 神戸新聞 2017年11月18日

山本さんや山中教授らの写真を紹介しながら講演する池谷准教授（左）＝ANAクラウンプラザホテル神戸



講演する山本育海さん  
筋肉の中に骨ができる  
難病「進行性骨化性線維  
異形成症（FOP）」と闘  
う兵庫県明石市の山本育  
海さん（19）が企画した  
講演会が18日、神戸  
市中央区のANAクラウ



ンプラザホテル神戸で開かれた。山本さんは自身の皮膚を提供し、人工多能性幹細胞（iPS細胞）を使って見つけた薬で、世界初となる臨床試験（治験）を進めており、患者や支援者ら約180人が最新の研究に聞き入った。

研究成果を全国の患者に知ってもらい、研究者と患者の懸け橋になろうと講演会を企画。一方で、FOP患者を招くためには移動や介助に多額の費用が掛かることから、率先して募金を呼び掛け、障害者を支援する財団などの助成を得ることで、開催にこぎ着けた。

山本さんは2010年、京都大IPS細胞研究所（所長・山中伸弥教授）に皮膚細胞を提供。病気のメカニズム解明などにつながり、同研究所がFOPの進行抑制が期待される薬候補を発見し、治験が始まった。

講演会では山本さんが、「IPS細胞の技術がなければ、進行していただけたかもしれない」などと話し、「必ず治る日がくると信じている。諦めない心を持ってほしい」と患者や家族に呼び掛けた。

続いて、薬候補を発見した研究チームの池谷真准教授が演台に立ち、約6800種の化合物で効果を検証したことなどを紹介。「薬候補が見つかったことは喜ばしいが、治すことまでが役目」と話した。

患者や家族は、青森から沖縄まで全国から18組が参加。岡山県の女性（40）は長女（8）がFOPを患っており、「なかなか患者同士が交流できる場はなく、このような機会はありがたい」と話していた。（藤井伸哉）

### 社説 学校の頭髪黒染め指導 理不尽な強要ではないか 毎日新聞 2017年11月19日

大阪の府立高校で、生まれつき茶色の髪を黒く染めるよう強要され、精神的苦痛を受けたとして、3年生の女子生徒が府に損害賠償を求めて提訴した。

訴状によると、生徒は入学以来、執拗（しつよう）に黒染めを指導され、度重なる染色を強いられた。そのため2年生の秋から不登校になり、文化祭や修学旅行にも参加させてもらえなかった。さらに3年に進級する時に生徒の名がクラス名簿から削除された。

これらが事実だとすれば理不尽な強要であり、生徒の身体や容姿を否定する人権侵害に当たる。生来の髪の色は個人によって違う。黒髪以外は認めないという指導は不適切だ。

府は裁判で争う方針だ。府教委によると、学校は「生まれつきの髪の色を変えるような指導はしていない」と主張し、この生徒はもともと黒髪だったと判断して指導し続けたという。指導方法に問題がなかったのか府教委は事実関係を明らかにすべきだ。また訴訟とは別に、生徒が再び登校できる配慮も必要だ。

頭髪に関する指導は、服装や遅刻対策とともに生徒指導の中心となってきた。校内暴力など「荒れる学校」が社会問題となった1980年代、管理教育が強まったことがある。パーマや染髪、脱色を禁ずる校則は今なお、多くの学校に残っている。

頭髪指導をする理由として「他の生徒に悪影響を与える」「茶髪が多いと風紀が乱れていると判断される」などが挙がる。だが学校の評判を気にするあまり、生徒の尊厳を軽んじるような指導は許されない。

そもそも「髪は黒色」という考え方が国際化社会にそぐわないのではないか。日本でも外国人留学生や外国にルーツを持つ生徒は年々増加している。そうした生徒たちが同じ教室で学ぶのは日常の風景になったことを認識すべきだ。

髪の毛が生まれつき黒くない生徒が学校に届け出る「地毛登録制度」を導入している学校も少なくない。管理しやすいだろうが、出自などプライバシーに関する情報だ。慎重な運用が欠かせない。

外見だけで決めつけず、画一的に押しつけることなく、生徒の内面を理解しながら成長に導く。これこそが本来の指導のあり方だ。全ての教育現場で自問してもらいたい。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

